

## 花の器

「全くお前は、とんだ間抜けをしたものだ」

黒い酒器を傾けながら、すでに酔いの回っている悪臭魔は気怠い目顔で魔羅に言った。メフィスト  
気怠いと言っても、どこか気品が感じられるのは、彼の高貴な出自によるものに違いない。

悪臭魔は先祖伝来の杖を、酒器の中身を踊らすように右手で遊び、ひよいと持ち直すとその先を魔羅に向けた。

魔羅はというと、すでに魔王から激語による叱責を受けた後であり、酒をいくらか飲んで心地よく酔えるはずがなく、眉を狭くして肴の臍物を弄いじっている。

暗い洞窟の中には、黒い霧が悶々と立ちこめており、彼らのような魔界に籍を置く者の心を慰めていた。わずかな灯りを頼りにその霧の向こうをよく見ると、角やら尻尾やらを持つ異形の者たちがそれぞれ隅に集まって酒宴をしている。

ここはそうした者たちが集まる場所であった

「俺も努力したのだ」

と、魔羅は肩を落として呟く。

しかし、今回彼が犯した失敗は途方もなく大きいものであり、実はここにこうして命があるだけでもありがたいのである。

先日、天竺で出自を王族とするシッダールタという者が、ついに悟りを開いてしまった。

これは魔界を揺るがす一大脅威、前代未聞の出来事である。

そもそもシッダールタは以前から魔界で危険視されていた男であり、彼の悟りを阻止し、誘惑し墮落させることは大変重要な使命だった。その大任を魔王から任されていた魔羅は、彼なりに健闘はしたのだが、結局は失敗してしまったのである。

「お前はやり方が下手なのだ」

悪臭魔が何度もさも知ったかぶりでそう言うと、しよげて聞いていた魔羅もさすがに腹が立ってくる。彼は西方では魔界の選良ではあったが、自分とて仕事を成功させて至れば魔王の一人となれていたし、経歴では負けてはいないのだぞと睨んだ。

「一体どういうやり方が賢いというのだ」

「いいか、俺たちは人間を墮落させたり、絶望させたりすることが重要な使命だが、何も正面から向かっていくというのは愚かというものさ。お前は、あの男が修行している間、

豊満であられもない姿の美女に化けて誘惑したろう」

「そうだ、いけないことか」

「そうさ。まず一つ、女が好きな男というものはな、大抵美女に弱い。だが、美女に迫られると逆に怖くなるのだ」

魔羅はどういうことかよく分からずに、首を傾けた。

「男は自尊心と劣等感の塊だ。だからよっぽど自信のある者か、厚かましい奴で無ければ、こわくしき 蠱惑的な美女が迫ってくると逆に怖くなるのさ。もっとうと、全裸で迫ってくる女を抱くよりも、通りを歩く楚々とした処女の、何かの拍子でちらりと見えた素足に劣情を抱く方が罪深いだろう」

「いや、待て。罪深さの話はともかく、男がみんなそうというわけではあるまい。醜女が好きな男もいれば、男が好きな男もいる」

「その通り。つまり人にはそれぞれの好みや指向というものがある。お前はシッタールタを誘惑することで頭がいっぱいで、そこを間違ったのだ」

魔羅はどこかなるほど頷いたが、途中その事を恥じてはっとした。

「しかし、お前はさきほど男というものはと、男を一括りに論じたでは無いか」

「俺が最初に言った男というのは、初歩の初歩。土台あるいは幻想の男というものだ」

魔羅は胡乱な目で同胞を見つめた。この男は、酒が入っていようがいまいがどうも語りたがりの議論好きであることは、以前からうんざりしていることであった。

だが、ここは一応聞いておこう。

「俺が先ほど言った男という者は、人間社会が生み出した幻想の男だ。その者本来の好みとかではなく、社会の中でのいると、こうであれと言われて、そうなってしまうという一つの大きな傾向だ。まあ、人間が集団で掛かっている病気みたいなものだよ」

そう言っ上等の酒を飲み干す悪臭鬼は、やはり自分よりも随分と先に進んでいる気がする。

これは不味いと、魔羅は慌てて身を乗り出した。

「では、俺はあの時どうすれば良かったと思う」

「そうだなあ。私ならまず相手と信頼関係を築いて油断させるね。それが構築できれば、普通は耳を貸さないことも正しいと思って聞いてくれるし、弱みも聞き出しやすい。相手がさつき言ったような奴だと分かれば、取るに足らない平凡な町娘に化けて、徳を積むためだとかなんとかいって相手の世話を焼いて油断させる。そしてある時、薄着で出かけて、

日差しの中で声をかければ、透けた乳房に気づいた相手は不意に劣情を抱く。そのことを自覚した時、悟りとはほど遠い罪悪感を持つことは間違いない」

魔羅も今度は自らのうなずきを止めはしなかった。さらに他には無いかと、もつと悪臭鬼の技術を聞き出したがった。

悪臭鬼も元来自分の考えを主張し教えたがる性分なので、魔羅を鬱陶しがるところか胸を反らせて続けた。

「うむ。では次に絶望についてだ。例えばだ、ここにまた悟りを目指す僧侶がいるとしよう。お前は どうする」

「そりゃ、すぐに全力で邪魔するさ」

悪臭鬼は指を前に出して振り、何度か舌を打った。

「それはいけない。それは痴愚ちぐというものだ。何も分かってはいないじゃ無いか。こういうものは、積み重ねが大事なのだ。私ならば、その僧侶が悟りを開くのを応援するね」

「なんだと」

「そして信用させた後、さああと少しで悟りを開けるぞというところで、囁ささいて奈落に突き落とすのさ。そう、囁ささくだけでいいのだ。それにな、絶望の質というものを考えてみる。すぐに墮落させるのよりも、そいつが時間や労力、熱情の全てをかけて積み重ねた後に、それを全て台無しにしてやる方が、より上質な墮落と絶望を導き出せる」

魔羅は唸った。どうやら自分は稚拙ちじつだったようである。

「うむ、とても勉強になった。俺もお前のように相手を育てた上で突き落とすように心がけるよ」

悪臭鬼は魔羅が素直に納得したことに、よしよしと微笑んだ。

「実はな、悟りだ仏陀だとはほど遠いが、今度東の国で小さな仕事を任されているんだ。今教わったことはそこで試してみよう」

魔羅が黒い霧をかき分けていそいそと洞窟を出て行くと、悪臭鬼は酒器を掲げ、左遷された哀れな同胞の背中に激励の言葉をかけた。

「時よ生まれ、汝はかほどに美しい」

初夏の陽光と風が、山の木々を撫でている。

もう鶯うすの声は当たり前になってあちこちで響き、山道には鶉草うすくさや姫萩ひめはぎや葶すみれの花が咲いている。媼おきなはそれらに耳と目を傾けて心を慰めながら、歩き慣れた山道を川へと向かった。

道のりは険しいものではなかったが、何しろ距離がある上荷物まで抱えているため、媼は息を切らし額には汗がにじみ出ている。

いつもはもつと近場の井戸で洗濯物を洗うのだが、今日はそこには行きたくなかった。平時、川や井戸には女たちが集まる。そこで交わされる巷談ちやうだんは、媼にとっても楽しみみの一つではあったのだが、先日どうにも嫌な話題が上ったのである。

『また子どもが出来たのです』

頬を赤めながら、若い娘が言うと井戸端の女たちはざわざわと輪になって群がった。自分が運びよった衣などは忘れ捨てて、娘の艶々とした肌やまだ出ていない腹を無遠慮に見る。

『おおっ、それはめでたいなあ。もう三人目か』

ここまでが良い。

するとやや年かさの女たちが、その娘を押しつけ輪の中心に来ると、まるで自分の手柄を語るように口々に言うのだ。

『やっぱり、女は子どもを産んで一人前じゃな』

『そのとおり』

媼と、彼女と同じ年代の女は、活気づく話の輪から閉め出されるような形になった。井戸端では媼たちはすでに長老の年齢だったが、今やここを牛耳っているのは先ほどの女たちである。

媼たちは枯れ草のような姿と気分のまま、若い者たちと少し離れたところで集まり、互いに黙って汚れた布を叩いた。干からびた皺だらけの肌と白髪、盥の水面に映る媼たちの顔は誰もが同じであった。

その表情には、世の中に対する怒りと羞恥がある。

およそ五十年ほど前、白村江はくせんじやうの戦いでこの国が唐国と新羅国に敗れて以来、時代は急激に映り変わっていった。中でも戦後の復興と国防体制の再構築は、政における最優先の課題であった。筑紫には唐国の都督府ととくふが置かれ、完全に彼の地の統治を回復するには莫大な労力が必要となったのである。

そういった国家の政に、当然民たちは翻弄される。

『農らの頃は、それどころでは無かったものなあ』

ある媼が皺だらけの手を見つめながら呟いた。その目には、かつての白く艶やかな肌を回想している。すると他の者たちも、ふと手を止めて体を起こし、ある者は面に刻まれた

皺をなぞり、ある者は晴れ渡る青空を眩しげに見上げた。

敗戦の後、男たちの多くは戦死し、農作業は女たちだけでしなければならなかった。朝廷が女たちに求めたものは、男の代わりとしての労働力だったのである。

『男も女も、同じ人間である』

と聞こえが良いことを役人は言ったが、つまるところ彼らが欲したものは単純な労働力であり、労役にかり出すに当たって女に対して配慮などほとんどしないということであった。なるほど命に男も女もないというのは、戦中、それが同じく紙よりも軽く扱われていた時代を知る彼女たちにも理解できる。けれども、やはり肉体的な差というものはあるのだ。

寡婦となった女たちは、汗にまみれ寝る間も惜しんで働き、課される治水や開墾の労役を果たし、気がつけば月のもは無くなり、髪は白くなっていた。食べ物は何となく貴族が全て奪っていき、親も遺された子どものほとんどは飢え死にしまった。

それでも、なんとか生きてきた。

ところが、ここ十年ほどの間に、事情が随分と変わってきたのである。

日本国の体制がようやく整い始め、続けてきた外交も功を奏し、半島の情勢も変わって落ち着き始めた頃、為政者たちはようやくこの国の人の数が急激に減っていることに気がつき始めた。いや、正しくは以前から危惧していた聡い者もいたのであるが、それがいよいよ表面化し、人々にようやく危機感を抱かせるに至ったのである。

『多産を推奨しよう』

ということと彼らの意見は一致した。

すなわち、女を労働力として活用するよりも、子を産み増やして国を富ませよと急激な方向転換をしたわけである。

そして十年。

ここに世代間の意識の軋轢、対立が生まれることは言うまでも無い。

『連中の口のうまい事よ。仏や孔子様の教えを持ち出して、子を産むことがいかに尊いかな喧伝し、若い連中にすり込んだな』

『無体なのは、子を産めない者や産まなかった者に対する考え方じゃ。前世の罪だの、国家への罪だなどと、無慈悲なことを言ってくる』

百年ほど前に持ち込まれた仏の教えは、庶民にいたるまで随分と浸透している。だから当然、それと多産を結びつけるのが為政者たちの巧みな詭弁だと言うことも、戦前戦後を

経験した彼女たちは分かっていた。けれどもそれより下の世代、無垢な若い娘たちは為政者のいうことを頭から信じ、それこそが至上の誉れとして受け入れている。

彼女たちは花の咲く輪の中から、時折媼たちをちらりと見ては、哀れむような、見下すような視線を向けていた。

『哀れな者たちよ』

『食うものがなくなれば、また別の事を言い出すものなのに』

『女の誉れが子を産むこととは限らん』

媼たちは自分たちの領域で口々に不満を吐き出したが、それでも死んでいった両親の顔や、今後老いて身動きがとれなくなった時のことや、人の使命だなどという大それた事を思うと、粘り着くような罪悪感や不安がいつも消えては蘇っていた。むしろ、自分たちこそ、為政者に騙され、時代に翻弄された哀れな奴らなのでは無いだろうか。

そもそも彼女たちが子を産んだことを誇りにすること自体、別におかしな事では無いのである。今の世の市井の女にとって、一体他に何があるだろう。やんごとなき身分の姫君ならまだしも、女にとって生き甲斐だの、誉れなどというものを他に見つける事が出来る者はそうはいないのだから。媼は若き日に、都や筑紫で舞や琴きんを身につけていたが、この田舎ではそれらは全く求められない。

少なくとも、子を産めば、労役を果たし終えたあの日より人は人から褒められよう。

山道を抜けると、ふわっと風が吹き抜け、揺れる芒すすきの向こうに小川が見えてきた。遠くにはささやかに揺れる水面に、一羽の白鷺の姿がある。媼は芒をかき分けて砂利のある川辺へ行こうとすると、脇にある芒の根元になにか石の置物のようなものがあるのに気がついた。

なんだろうとしゃがみ込むと、それはやはり石像である。たが輪郭ははっきりしておらず、地蔵なのか観音なのか、あるいは道祖神なのかもよく分からない。そうそうよく来る場所では無いが、以前来た時はこんなものがあるとは気づかなかった。

場所からして、治水の守り神だろう。ここは大雨になると増水して水につかるから、歳月が過ぎる内に石像の輪郭が丸くなって、ぼやけてしまったのだと思うと納得がいく。とにかく神仏の類いには違いない。

媼はしばしの間、その石像の顔に当たる部分を睨むようにのぞき込んだ。

彼女は神仏の類が嫌いであった。戦いの時は前夫が帰ってくるようにと頼んだが、それを叶えてくれず、その後の苦難もどうにもしてくれはしなかった。その上、為政者たちは

彼らの教えだといって多産や子孫の繁栄を推奨する。籠を売りに出たことのある市場の帰り、美々しい寺で見た仏の顔は、なぜか顔も知らぬ為政者と重なるのだった。

だが、長年の風雨にさらされ、川の増水によって輪郭と正体を失ったこの偶像は、まるで自分のようだとも思えて、なんとも哀れで愛おしいような気持ちにもなってきた。この石像にも、自分にも、かつては生の目的を自分の掌に握っていた時があったのだ。

媼は目を潤ませると、地に膝をついて手を合わせた。

その時、媼は自分が何を祈ったのか、願ったのかよく分らない。だが、しばらくして媼が立ち上がろうとすると、さつと目の前を白鷺が飛び立っていったのだった。

白鷺を目で追い、その姿と日輪が重なり、眩しさのあまり目を細めて手をかざした時、媼の頭に不思議な声が響いた。

「お前の願いを叶えよう」

まるで母のような声は誰なのだろう。

そう思う内に、媼は意識を失っていった。

眩しい光を感じて瞼がびくっと動き、目を開けると媼は芒の根元で寝転がっていた。慌てて起き上がって周囲を見渡したが、川音と風に撫でられた芒が囁く声が聞こえるばかりである。はっとして洗濯物の方へ顔を向けても、ちゃんと盥の中にあつた。寝ている間に特に異変があつたわけでは無いらしい。

だが、頭上を見るときもう随分と高くなっている天道がある。朝に出て昼までに帰る予定だったので、媼は慌てて川辺へと向かい、そこに盥を置くとまずは清らかな水を手ですくい、雫を汗ばんだ首筋や脇へと押し当てる。零れた雫が乳房や脚を這うこそばゆさに息を漏らすと、媼は一息ついてしゃがみ込み、汚れた衣を洗い始めた。

普段は他の媼たちと噂話にしる、愚痴にしる、それなりに楽しく喋って作業をしていたが、一人で洗濯をするというのは、静かな分、色々と雑念が寄ってくるものであつた。

それこそ子を授かった娘たちの笑顔だの、子を持ち育てる女たちの得意げな顔だの、または媼たちの怨嗟の顔だの。そういうものから離れたらと思ひ、こんな外れの川辺まで来たというのに、余計に女たちの顔が思い出されてならない。

媼はうんざりして立ち上がり、腰を伸ばした。

全く嫌な人生だ。

そう思っていると、ふと先ほどの白鷺はどこにいったのだろう思い、首を左右した。だ

が、川の上にも下にも白鷺の姿は無い。そういえば、先ほど、飛び立ったのだと気づいたとき、上流を見ていた媼の細めた目に奇妙なものが映った。

薄紅色の体に、つんと引つ張られたような頂部。上流から流れてくるそれは、どうも桃らしい。川の流れに乗ってどんぶらこことゆらゆら流れている。

だがその大きさが尋常では無いのである。普通桃と言えせいぜい掌くらいのものだが、あれはどう見ても持ってきた盥ほどあるではないか。重みで沈んでしまっても不思議ではなかった。

「おかしな桃だこと」

怪訝に思いながらも、媼は夫が大の桃好きであったことを思い出した。あれを持って帰って食わせてやれば、さぞ大喜びするだろう。

(まあ、私は食べないけれど)

媼は着物の裾を上げて紐で結ぶと、川の中へ入っていった。水はひやりと冷たいが夫のためだと我慢する。深さと流れの強さから、これ以上入ると危険であると思ったところで、不思議なことに桃は媼の方へ甘えるように寄ってきた。

まるで迷子になった子どもが、母を見つけたかのようなのである。そう感じた媼は、気がつけば腕の中の桃の産毛を撫でていた。

「なんじゃ、この桃は」

喜ぶはずと思った夫の翁は、媼が抱えて戻った大きな桃を見るなり警戒して後ずさった。普段、あまり感情を見せない男だが、今回ばかりは目を見開いて驚いている。

媼はこの大きな桃が、川から流れてきたのだと説明すると、翁はますます怪訝な顔をした。

「腹でもこわさんかの」

媼が帰り道、ずっと抱えていた桃である。すっかり愛着のようなものを持っていた媼は、それならば食べなくても良いと、翁から桃を奪い取った。そしてついでに今日、河原で見かけた石像や白鷺のことも教えてやった。

すると翁は途端に顔色を変えた。

「これは神仏からの贈り物に違いない」

と態度を一転させて再び媼から桃をひったくる。

「これはお祀りする」



翁はそう言って、屋内に簡単な台を作り、そこに桃を置くとお供えをして奉った。

媪は食べれば良いのにとその様に溜息をついたが、確かに神秘の桃といえそうである。言われたとおりに米や水を桃前に供え続けた。

その神秘の桃が、金色の光を帯びて輝きだしたのはそれから七日たった夜のことだった。

「あ、あなた。桃が桃が」

目を押さえながら、媪は翁の背に隠れて縊った。

「いや、慌てるな。これは吉兆じゃ」

翁が眩しさのあまり腕で光を遮り、片方の手で桃に触れようとしたその瞬間。

パカリ。

桃の中心が大きく割れ、光が朝日のように一際強くなる。その強烈な光とともに、家中に赤子の声が響き渡った。

翁と媪は顔を見合わせて、眩しい桃に駆け寄った。光がようやく収まり、桃が見えるようになると割れた桃の真ん中に、瑞々しく白い肌の赤子が泣いているではないか。

男の子である。

老夫婦の開いた口が塞がるのには、随分と時間が掛かった。

桃から生まれた桃太郎の話は、村の者たちの間でもすぐに話題となった。

媪はこの歳で初めて授かった赤子である。どうしたものかと難儀することは多くあった。

「なんて可愛い赤子でしょう。こんな可愛い子を見たことが無い」

だが村の子を持つ女たちに知恵を聞いて回ると、あれほど媪を冷ややかに見ていた若い女たちは、媪が玉のような赤子を抱いて訪れると、子がいるのならば自分たちの仲間だとばかりに輪に加え、快く色々<sup>色々</sup>と知恵を授けてくれた。武具がそろっていなければ侮られる武士のようであったが、これはこれで、何か承認を得たような気になって悪い気はしない。

どうして泣き止まないのか、嘔気<sup>げんき</sup>をさせるにはどこをさすってやれば良いのか。とにかく教えを乞わなくてはならない。それにいざという時、預けることができるのも、彼女たちなのだから。

それに、かつては自分を哀れんでいた者たちが、愛らしい赤子を見るなり、息をのんで言葉を失う様を見るのは、小気味よく、また誇らしい気持ちにもなれた。

二人にとってこの息子は、まさに目に入れたも痛く鳴いたほどの宝であった。村の人々も誰もが桃太郎を慈しんでくれ、この世はこのように朗らかなものであったのかと、老夫

婦は語り合った。

だがある時、腹の大きな娘を見て、媼は思った。この子が桃から生まれたのではなく、自分が産んだ子であったならばなお良かったのに。自分は女に生まれながら、子を産むと言うことを経験したことが無い。それが唯一の心残りのようでもあった。

そんなある日、媼が井戸端から帰ろうとした夕暮れ時の事である。

紅い蜻蛉が飛び交う道で、以前親しくしていた同じ年頃の女たちの一人とぼったりあった。薄暗くて顔つきは分からないが、自分と同じような年のようだから、ともに戦後の辛苦を重ねてきた仲間であろう。

しかし、媼が桃太郎を授かると、自然と距離が出来て話す機会も減っていったのだった。

媼は挨拶したが。相手の女は目も合わせずに無視をする。

そしてすれ違い間際に、ぼそりと呟いた。

「人殺しの男と、売女が赤子を授かるなど汚らわしい」

村のある娘の腹に、再びややが出来たと知れ渡ったのは、それからひと月ほど経ってからのことだった。こういう事は今までも何度かあった。こんな時、媼は梅雨が来たような気持ちになる。水場で誰もがその娘を囲んでいると、その輪の中にも、かつての仲間の元でもなく、桃太郎をぎゅっと抱きしめて遠くから見ている彼女の姿があった。華やかに鳴く雀の内にも、陰気な鳥の群れも入れぬような物悲しい様である。

はたから見れば、普段輝く桃太郎のために、村中の耳目を集めている彼女が、娘にひと時その座を奪われて嫉妬しているようにも見えた。

しかし雀の輪のむこうの、媼の古馴染みには、そのまなざしにどんな気持ちが入められているのかが手に取るようにわかっていた。特にあの日、蜻蛉が夕陽の中の塵埃のように見えたあぜ道で、媼の掻き巻る言葉を投げかけた者などは、こちらに薄ら笑いを浮かべている。

媼はほんの刹那視線を合わせると、すぐに振り返って家へと走り出した。

その夜、夜の帳が下りた頃、媼は一人山道を越えてあの河原にいた。手に灯りは持っていないが、望月の銀光で足元の水さえ魚の影を映すほどにすきとおっている。

輝く水面に足をつけ、夜の静寂を感じていると、媼はふと、これが夢ではないのかという気になった。そうでなければ、自分はどうしてこんなところにいるのだろうか。

その時、媼の耳にいつか昔聞いた老婆の声が響いた。

『檳榔樹びんろうじゅの粉を丸めて、薄荷はっかの研ぎ汁と水銀を指に塗りつけるんじや。それをなかに深くに押し込んで、一晚そのままにする。すると腹の子は腐って流れ出るけん』

それはまだ自分が娘だった頃、ある老婆が自分に言った言葉である。暗い小屋の中で聞いたその声は、老婆の顔をすっかり忘れた今でも、富士の雪のように嫗の脳裏に解けずにあつた。

その老婆には何度か会っている。

ああ、声だけではない。老婆の氷雪のように冷たい手も、覚えている。

それは、ちょうどこの夜の川の水のようだった。そういえば、あのあと身体を清めに入つたのも、このような静かな小川だった。最初は無心で身体を清めようとしたが、二度目からはただの儀式になった。それほどに無謀で、無知だった。

後悔している。その思いは年をとるほどに激しくなる。けれども、当時それくらいの勢い、無謀さがなければ、あの時代を生き抜くことはできなかったのではないだろうか。生きるためならば、一体どこまで許されるのだろうか。

媼は思い詰め、沈んでいく心に錨を込めるように、水面の月を見つめた。

『ねえ、どうして僕を生んでくれなかったの』

『どうして他人のあの子を大事に育てているの。ずるいよ』

『僕たちは殺されたのに』

『それに今、とてもひどいことを思っているでしょ』

望月の光が届かぬ暗い水中から、何人かの幼子の声が響いてきたかと思うと、小さな白い手が無数に伸びてきた。

媼は声を上げることが、動くこともできなかった。手は媼の衣を触れ、肩や腕や足首に巻き付き、強い力で握ってきた。媼は重心を崩して、その場に銀のしぶきを上げて倒れ込む。

この声の主たちが一体何者か、それは女の直感で分かっている。分かっただけじゃ、もはや命を取られても文句は言えまい。

「ごめんよ、ごめんよ。でも、私、子を産んでみたい」

『その機会はたくさんあったのに。今更思うなんて。僕たちじゃだめだったの』

「ごめんよ、ごめんよ」

天から流れる清い銀の光は、もはや我が身を裁くように鋭く感じられた。

『そんなに詫びるのなら、こっちに来てよ』

『そうだよ。母ちゃんも一緒にこっちに来なよ』

それがこの子たちへの償いなのだろうか。媼は自分を縛る手に抗う力を一瞬弱めた。すると手は欣然とさらに力を強くする。

だが引きずられ、冷たさも忘れて肩が水面につかるその瞬間に、媼の脳裏には桃太郎の微笑む顔が浮かんだ。全身に力が入り、踏みとどまる。

「私はまだいけない。ごめんよ。ごめんよ。私には、桃太郎がいるのだもの。あの子はお前たちなのだもの」

嗚咽しながら絞り出した声が、波紋となって響いた。

白い手は一瞬、ぴくりと止まり、無数のうちの一つの掌が、媼を愛おしむように頬をなでるとすべては波が引くように水中へと帰っていった。

翌朝、媼は寢床で目を覚ました。自分を揺らし、熱い手で頬を叩くのは無邪気に微笑む桃太郎だった。

それから時は過ぎ、成長した桃太郎は鬼退治に出かけることになった。

鬼の大将の名は温羅といい、吉備国に根城を築いているという。朝鮮から来た温羅は吉備国に製鉄技術をもたらし栄えさせたが、帝に服従せぬ悪しき鬼であると役人たちは言った。

これを倒さねば、今に帝の治める地は焦土となり、人々は皆殺しにされるといふ。

「そんなことは嘘じゃ。やつらが攻めてくると言うならまだしも、悪さをするといい噂も聞いたことが無い」

媼は白い髪を振り乱し、涙を流し我が子の胸を叩いて訴えた。

これは為政者たちのいつもの手である。もう、戦うより他は無いと民に訴え煽るが、本当はそうでは無い。彼らは吉備国の豊かな土地を征服したいだけなのだ。

白村江の戦いと戦後を経験した媼は、その事がよく分かっていた。

だが凛々しく、そして雄々しく成長した桃太郎には母の言葉が届かない。初夏に吹く風のように爽やかな笑顔で、微笑み、形のよい鼻で息を吸い込むと、大丈夫だ心配するな、手柄を立てて帰ってくる、褒美を楽しみにしてってくれと母を抱擁する。

もう意思は変えられまいと悟った。このような状況は、若き日、前夫を見送ったあの日に似ている。

その時、媼は長年の想いを尋ねずにはいられなかった。

「ねえ、桃太郎・・・お前は一体、どこから来たんだい」

媼の問いに、桃太郎は決して揺らがぬまなざしで、母を見つめ返した。その瞳の中には日輪があるほどに、媼には眩しい。

そして常夏と呼ばれる撫子の花のように微笑んだ。

「何言ってるんだよ。母ちゃんの腹の中からは決まってる」

それが昨日のことである。

久しぶりに静かな、夫婦だけの夜であった。

聞こえてくるのは、吊した籠で飼ってあるメジロの声だけで、二人は黙って箸を動かしている。それでも無表情の二人を見れば、誰もがまるで人形か、案山子のようなと思うだろう。飯に羽虫がよってきても、お互い何も気にしない風である。

子どものいない夕べとは、このように寂しいものであったのか。媼は大きな溜息をついた。

籠の中で飛び跳ねて鳴くメジロと、ゆらゆらと動く紙燭の灯りだけが生氣を感じさせていた。

「あんな技を、あの子に教えなければ良かったのに」

媼は別に翁を責める気は無かったが、口に出すと結局そのように聞こえてしまう。

翁は一瞬箸を止めたが、すぐにまた動かした。

「あの子が、望んだ事じゃ」

「いいえ、あなたは自分の技の継承者がほしかったのですよ。白村江の戦いで、百人斬りとも千人斬りの鬼神とも言われたその技を、誰かに教えたかったです。あの子はなんでも出来て、全部受け継いだ。だから調子に乗って、鬼退治だなんて」

「あの子ならば、相手が誰だろうと負けはしない、神仏の加護を受けた桃の子じゃ」

「あの子は私たちの子ですよ。引きずられて連れて行かれるどころか、自ら進んで行ってしまったわ」

媼は箸を握りしめながら、片方の手で両目を覆った。

あの子の無邪気な笑顔、初めて立った時の驚きと喜び、わがままを言う愛らしさ、緊張すると頭を掻く仕草や癖、えくぼ。子どもの時の高い声、大人になってからの響く低い声。全てが宝である。

その宝を失う可能性があること全てが怖かった。

どうして夫は、人殺しの技を教えたのだろうか。あれほど反対しても、影で教えていた

のだ。それが今日のことを招いたかと思うと、憎しみさえわいてくる。

「もう、あの時のことはお互い忘れると誓ったじゃありませんか」

翁は黙って揺れる炎影を見つめていたが、ぽつりと呟いた。

「あの子は、農らのことを全部知っておった」

一瞬眉を顰め、それがどういう事か理解すると、媼は全身に寒気を感じた。そしてすぐに誰が、と思い、以前の仲間たちの顔が思い浮かぶと、箸を落として震える手で口を塞いだ。

「農が戦いで多くを殺した兵の生き残りと言うことも、お前が昔していた仕事のことでも部どこからか聞いておった。人は残酷じゃなあ」

箸を置き、溜息を吐く翁は、今事実を知った媼よりは随分と気持ちに整理がついているようだった。

あの子はそれを知って何を思ったのだろうか。あの無邪気と思っていた笑顔は、いつの頃からかそんな影を覆い隠すものにならっていたのだ。

媼は、自らの恥部を我が子に見られた羞恥心と、そんな人の悪意の闇から守れなかった自分を罰したい気持ちになった。

古い者が昔は当たり前だったことを若い者に語る。今では考えられない当時の状況や常識に驚く。そして嫌悪される。

「それであの子は、鬼退治に」

自分たちが嫌になり、この家から出て行きたかったのだろうか。

「あの子は優しい子じゃ。自分が手柄を立てて村に帰れば、農らの名誉も守れると思ったんじゃないだろう」

長い築土の内側に、大きな屋敷が建ってからも何年にもなる。

主である吉備殿の伝説は、もはや誰もが知るところであった。

かつて吉備を治めていた温羅との、長きにわたる朝廷軍との戦い。その戦いに当初は介の兵として参加しながらも、三人の優れた家来とともに獅子奮迅の働きで戦を重ねるごとなり出世し、見事温羅を討ち取った大英雄。

その数年のち、彼が寵愛を受ける女帝の後押しもあり、通常であれば皇族、公卿が務める兵部卿に抜擢され吉備国を与えられた吉備殿、かつての桃太郎といえは生きた伝説であった。

表では、金の細工に縁取られた豪華な車が行き交う広い屋敷の一室で、媼は絹の布団に包まれて床についていた。思えばもう何日も起き上がってはいない。毎日のように薬師はくるが、薬は効かず、彼の暗い顔を見れば自分はまだもうそう長くは無いと言うことが分かってくる。

媼は薬師が平伏したままさがると、むしろほっとして目を閉じた。まぶたの裏にはもう何年も前に亡くなった翁と、前夫の顔が浮かぶ。

「すぐいきますよ」

媼は宙を見て、一人微笑んだ。

自分はいよいよ危ないらしい。本当であれば桃太郎に看取ってほしいところだが、何しろあの子は將軍として西国に遠征しているから、まさか帰って来られるはずも無い。だからむしろ、役目を終えて帰ってきた時、親の死に目に会えなかった事を悲しむ優しいあの子の事を思うと、それで胸が痛くなった。いやそれでも。

と、媼は自分の人生を振り返って思った。到底、他では考えられないほどの良い人生だったのでは無いだろうか。

媼がそう思い、再び目を開いた時、絹の布団のその脇に、座って微笑んでいる男に気がついた。男は豪商風の装束を身につけてはいるが、今まで見たことも無く、にこにこしてこちらを見ていた。

いかに豪商とはいえ、ここは吉備殿の屋敷である。商人が勝手に上がり込むのは何かおかしい。

一体彼は誰だろうと、媼は目で訴えた。

「久しぶりだな」

男は微笑みのまま、横たわる女の顔をのぞき込んだ。表情とは裏腹に、その口調は粗野である。

「あなたは」

「俺は魔羅という。俺は昔、山裏の河原でお前に祈られて、願いを叶えてやったのだ。覚えていよう」

媼は一瞬、枕に頭を預けたまま、はたと首をかしげたが、不思議と流れる桃をこの手に抱いたあの日の出来事がすぐに蘇ってきた。

「私は石像に祈ったはずだけれど」

「そうだ、俺はあの石像に宿っていたのだ」

何を言っているのだろうかとは思わなかった。なぜかこの男の言うことは本当なのだろうと納得してしまう何かがあった。

「ならば、お礼を言わなければいけません。おかげで私は、幸せな人生を送れました」  
媼は微笑んだ。

すると魔羅はにやりと先ほどとは違う下卑た笑みを浮かべた。

「いや婆さん。お前は人生に一つ大きな心残りがあるだろう。あの桃太郎を産めなかったことだ。お前はあの子が桃からではなく、自分の腹から生まれた子ならばよいのにと、子どもを産んでみたかったと後悔しているのでは無いか」

媼は答えず、ただ胸と布団を上下させた。

「だが今こそ教えよう。お前はあの桃の使い方を間違っていた。あの桃は、本来は食べるものなのだ。もしあの時お前と翁が食べていれば、二人はたちまち若返り、あの子を産むことが出来ていた。なんとういう愚かさだ。お前は望みを指先でかすめていたのだ。どうだ悔しかろう。俺はな悪魔なのだ。全てお前の絶望を見るがためにこうしたのだ」

魔羅は今ここにひとつの絶望が生まれるのだと思うと、今にも踊り出しそうな愉快な様子で哄笑していた。

しかししばらく笑っていたが、媼は声も上げず、動じてもない。ただにこにここと微笑んでいる。もしや、もう頭が正しく働いていないのか、気でも触れたのかと不安になる。それでは不味いのだ。

すると媼は安らかな微笑を浮かべたまま、皺と染みだらけの両手を魔羅に合わせた。

「おい、一体何のまねだ」

「確かにあの子が腹を痛めて産んだ子ならばと思い、女ならば一度は子を産んでみたいと思っていた時期もありました。けれどもあの子と過ごす時間と、その中で育った温かいものは、そんなことを思わなくしてくれたのです。そして私はその温かいものをあの子にくさんと与え、注ぐ事が出来ました。私はその器を求めていたのかもしれませんが。そして中身は、あの子から別の者へと受け継がれるでしょう。私の人生は幸せでした。何も後悔はありません」

魔羅は媼の満ち足りた微笑みを脅威に感じ、慌てて後ずさった。

「やめろ、俺は悪魔だぞ。人からそんな目で見られてなるものか」

「私を幸福へと導いてくれたものが、神仏の敵であるはずがありません」



媪の熱い涙が頬を伝って落ちた時、魔羅は震え上がって逃げようとした。

しかし、気がつけば自分と媪の頭上には金色の無窮の光が降り注いでおり、五色の花びらまでが部屋にひらひらと舞っている。

これではまるで、極楽ではないか。

「あなた様は私を救って下さった仏でございます」

それが媪の最期の言葉であった。

その瞬間、魔羅が本来の黒い異形の姿になったかと思うと、光を受けた彼の体も輝きだした。その姿は、もはや魔界の者では無い。

「なんとということだ。なんとということだ。この俺が・・・仏の眷属に！」

魔羅の異形の姿は転変し、気がつけばそこには輝く白鷺の姿があった。白鷺は一度大きく鳴くと、部屋を飛び出て天へと舞い上がっていった。

後に都に帰った桃太郎が、家人からその話を聞くと、母の御霊はその白鷺が、極楽へと導いてくれたに違いないと語ったという。